

社会主義の歴史的 位置づけに関する一試論¹⁾

望 月 和 彦

「たとえ一社会がその運動の自然法則を探り出したとしても——そして近代社会の経済的運動法則を明らかにすることは、この著作の最終目的でもある——、その社会は自然的な発展の諸段階を飛び越えることも法令で取り除くこともできない。」
——K・マルクス 『資本論』

「歴史の中心問題は、民族の場合でも国家の場合でも、変化の性格を発見し説明することである。」
——E・H・ノーマン 『クリオの顔』

「さて、お前たち〔人間〕の種族における〔国家の〕良い出産と不出産のことに
ついては、お前たちが国の導き手として教育した者たちがどれほど知恵に秀でて
いても、彼らは推理（計算）と感覚によってこれをぴったりと突きとめることは
できないだろう。それはやがて彼らの目を逃れることになり、生むべきでない時
に子らを生むということが、いつかは起こるであろう。」

——プラトン 『国家』

は じ め に

現実存在した社会主義は、その理想主義的な装いとは裏腹に、数々の悲劇をもたらした。社会主義体制下で多くの人々が生命を失い、身体を拘束さ

1) この論文を執筆するに当たっては、本学の多くの先輩・同僚教員から多くのご教示を戴いた。特に本学総合研究所共同研究プロジェクト「平和原理の探求」(代表：村山高康社会学部教授)のメンバーから貴重なコメントを戴いた。ここに感謝の意を表するものである。ただし、この論文の内容はあくまでも筆者個人の見解であり、あり得べき誤りもすべて筆者個人の責に帰すことはいうまでもない。

れ、職業や住居などの生活基盤を奪われた。そして他の人々も社会主義体制の下で経済的・政治的に不自由な生活を強いられた²⁾。

この非人間的な抑圧体制は、1989年以降崩壊した。ソ連・東欧では、社会主義政権自体が瓦解し、社会主義経済体制も放擲された。他方、中国のように、共産党が引き続き政権を握っているものの、社会主義経済体制を事実上放棄し、資本主義経済体制に移行しているところもある。いずれにせよ、社会主義経済体制はごく少数の例外を除いて、すべて崩壊し、今や世界経済のほぼすべてが資本主義体制となった。

この社会主義の崩壊という事実直面して、現実存在したこれら社会主義体制を実は社会主義ではなかったとする主張がしばしば聞かれるようになった³⁾。これには社会主義や共産主義イデオロギーを擁護するという政治目的も含まれているように思われる。だがこれは本質的には解釈の問題であり、いかようにも議論可能であって、はっきりとした結論を得ることは不可能である⁴⁾。そこで本稿では現実存在した社会主義体制が本当に社会主義であ

2) 現実の社会主義に対する批判の例として、鷲田 [37] 参照。

3) 例えば、大谷禎之介・大西広・山口正之 [4]、特に第二章第四節「スターリン体制現出の諸成因」参照。

4) 社会主義という概念を明確に定義することはほとんど不可能であるように見える。特に、現存社会主義体制が崩壊した後、現存社会主義が社会主義ではないとする議論が跋扈することによって、社会主義が全く概念上・空想上の産物と化した今日ではなおさらである。例えば、シュンペーターは、社会主義の定義について次のように述べている。「われわれのいう社会主義社会とは、生産手段に対する支配、または生産自体に対する支配が中央当局にゆだねられている——あるいはこうもいえると思うが、社会の経済的な事柄が原理上私的領域にではなく公共的領域に属している——ような制度的類型にほかならない。社会主義はいままでよく知的プロテウス [Proteus 自由自在に姿を変えるギリシア神話の海神] だといわれてきた。社会主義を定義するには種々さまざまな仕方がある——社会主義とは万人のためのパンを意味するというようなおめでたいものは別としても、もっともだと思われうる多くの定義の仕方がある——のだから、必ずしもわれわれの定義が最上のものであるというわけではない。」

シュンペーター [11] 262ページ。

またメイリアも、「社会主義という言葉は、地球上のどこにも、観測者全員の意見が一致するような特質を持った実体がないという点でユニークといえる」と述べている。そのため「社会主義という言葉は歴史用語でもなければ社会科学用語でもなく、あたかも救済宗教の呪文に近い言葉なのである」とまで言っている。

M・メイリア [33] 45-46ページ。

ったかどうかの議論を避けるために、現実存在した社会主義を「現存社会主義」と呼ぶことにする。この小論の目的は、社会主義に対してこれまでまわりついていた先入観を取り去り、あらためて現存社会主義が実はどんな体制であり、それが世界の歴史の流れのなかでどのように位置づけられるかを考察することにある。さらに、社会主義の定義が、現存社会主義の束縛から解放された現在、先進諸国の資本主義もより自由な文脈で解釈することができるようになった。そこで、そのような文脈のなかで、現在の資本主義が歴史的にどのように位置づけられるかという問題も合わせて考察する。

資本主義のパロディとしての現存社会主義

現存する社会主義が、本当の社会主義ではないという主張は、現存社会主義崩壊後に初めて登場したわけではなく、ロシア革命直後から、多くの人たちによって論じられてきた⁵⁾。かつてソ連で社会主義国家が成立したというその事実だけでそれを社会主義と規定した人たちを批判したトロツキーは、ソ連の社会主義を資本主義から社会主義への過渡的体制と考えていた。

視点を変えれば、現存社会主義は資本主義の一種のパロディと考えることもできる。例えば、マルクス主義者は「国家独占資本主義」という概念を使うが、その純粋な形は、実は現存社会主義経済体制に見られるのである。すでにトロツキーが指摘していたように⁶⁾、生産手段の私有の廃棄といいながら、共産党指導部が、その社会のすべての生産手段を所有していたのが現存社会主義であり、極端な場合は、北朝鮮に見られるように、故金日成一族が、北朝鮮のすべての生産手段を所有していたのである。これ以上の私的独占または国家独占資本主義体制は考えられない。資本主義体制では決して実現できないほどの純粋な国家独占資本主義体制が現存社会主義では成立していた

このように社会主義の定義は誠に厄介なものであるが、ここでは、シュンペーターの定義に従うことにする。

5) 史的唯物論からの現存社会主義の位置づけの試みについては、

小澤光利「マルクス経済学史としての「社会主義」論」、大谷禎之介・大西広・山口正之〔4〕参照。

のである。したがって、資本主義体制の本質的欠陥である労働の疎外問題は解決されず、そのうえ、独占にまつわるすべての弊害も現存社会主義においては明白に現れていた。それは自由と効率の喪失である⁷⁾。

そこでは、経済と政治の両面での権力が、個人に集中していた。そしてその権力は世襲されたのであった。このようなことも先進資本主義社会では考えられないことである。この体制において、権力者は、想像を絶するほどの贅沢な暮らしをすることができ、一般大衆との生活レベルの差は先進資本主義体制諸国では考えられないほどの大きさに達していた。例えば、1989年に軍事裁判によって処刑されたチャウシェスク夫妻に対する検事の論告は、「チャウシェスク夫妻は、美服美食、王侯よりも華美な生活を続け、飢える国民を搾取した」というものであった⁸⁾。

まさに、ボードリヤールの言うように、「巨額の剰余は最悪の貧困と共存することができる。どんな場合でも、一定の剰余は一定の貧困と共存する。いずれにしても、この剰余の生産が全体を統御する。生きのびることの境界値は、下からではなく上から決定されるのだ。場合によっては、社会的命令が要求するならば、生きのびることも全くないこともある」という状況が現存社会主義体制で出来したのである⁹⁾。歴史的事実として、現存社会主義体制

6) 「Mutatis mutandis [必要な変更を加えれば], ソヴェト政府は資本家が個々の企業にたいして占めているような地位を経済全体にたいして占めている。」

L・トロッキー [18] 64ページ。

7) ヤコブレフは現存社会主義の現実を次のように記述している。

「生産手段が国家によって社会化されたために、労働者や農民は、必然的に労働と生活の基本的手段から疎外されることになった。社会主義諸国で起きたことは、封建制でも資本主義体制でも起きたことはなかった。プロレタリアート独裁がしたことは、人びとの解放ではなく、奴隷化だった。」

生産手段の収奪、つまり、他人の財産の再分割は、勤労者を裕福にするどころか、その逆に、仮借ない経済発展法則と倫理上の報いという法則に基づいて、屈辱的なルンペン化を勤労者にもたらした。政治的・経済的行為としての生産手段の収奪が、人びとの心理と意識を歪めることになった。さらに、建設的な労働への刺激をすっかり取り去り、自分自身の幸福、自分自身の生活に対する人びとの責任を低下させることになった。」

A・ヤコブレフ [34] 116ページ。

8) 加瀬俊一 [5] 117ページ。

9) J. ボードリヤール [26] 81ページ。

では、時として犠牲者が数百万人を越える大規模な飢饉が生じた。この飢饉の原因は、共産党指導部の失政であり、その意味で人為的で、中央指令経済の大失敗といえるものである。

もっとも、同じく独占資本主義社会であるとは言っても、現存社会主義における独占と資本主義における独占ではその成立過程がまったく異なる。後者では、繰り返し起こる恐慌を通して、資本の二極分化が進み、いわば、社会的淘汰過程が働いて、多数の企業は倒産したり、より大きな資本に吸収され、少数の大企業が生産過程を支配するものとされている¹⁰⁾。これに対して、前者では、革命を通して、または国有を合法化する立法措置によって、新たに支配者となった階級が、資本家階級から資本を収奪することによって自ら独占資本となるのである。それ故、独占に至るプロセスが前者では経済的であるのに対して、後者では政治的である。従って、外見上は、同じように国家独占資本主義に見えても、その成立経緯が異なるために、独占企業の行動様式も異なる。

その最も大きな相違点は、独占企業の行動規準にある。現存社会主義には利潤は存在しない。価格体系が人為的に決定されている現存社会主義においては、利潤を計算するための正確な物差しが存在しない。従って、資本主義における独占企業の利潤最大化という行動規準は、現存社会主義では実行し得ない規準なのである。他方、現存社会主義体制の社会目的は、生産の最大化であると考えられる¹¹⁾。そこでは、投資効率は無視されて、ひたすら生産の最大化が追求されたのであった。このようなことは資本主義では起こらな

10) これはあくまでも、経済学一般でそう主張されているということであって、筆者がそれについて同意しているわけではない。現実の経済を見れば、政府による独占を除けば、社会的淘汰によって独占が生じることはないといってよい。そもそも社会的淘汰という考え方自体、進化論からの類推であるが、肝心の生物社会において、そのような淘汰プロセスが存在すると認められていないわけではない。今日見られる生物種の多様性は、このような淘汰プロセスと矛盾する。これと同じく、経済においても、すべての分野で競争によって、企業の集中が進むわけではない。むしろ、多くの分野では、多くの企業が、自らの「ニッチ」をもっており、その中で経済活動を行っているのである。

11) この論点については、機会を改めて論じることにはしたい。

い。

例えば、売上高最大化が企業の目的とされる場合もある。だがその場合、その背後に規模の経済や習熟効果があるわけで、はっきりとした合理性があるのだが、現存社会主義体制における生産最大化は、それ自体が目的化していた。後述するように、ソ連のように収穫逓減がはっきりと出てきているような経済で、ひたすら生産最大化に固執すれば、投資効率は低下する一方となり、社会的余剰も減少する。そして事実ソ連末期では、投資効率がゼロにまで低下したのであった。それにも関わらず、ソ連では最後まで生産の最大化が追求され、膨大な投資が行われていたのである。

さらに、独占的生産の弊害は、資本主義体制でよりも現存社会主義体制においてより明白であった。現存社会主義体制においては、国家による生産物の独占的生産が遍在していたからである。そこには利潤という概念は存在しないが、資源の横領という形で、富の独占が図られていた。現存社会主義体制では、政治権力と経済力が統合されているので、現存社会主義体制における一般大衆は、生活水準の低下だけではなく、政治的自由すら奪われ、半隷属状態におかれたのである。このような社会状況を考慮すれば、現存社会主義とは、資本主義ですらなく、私的支出と公的支出の区分のできていない一種巨大な「家産国家」と言うことができよう。

冒頭にも述べたように、現実存在した社会主義を社会主義ではないとする人たちもいる。その代表的な例がトロツキーである。かれはソビエト社会主義を本当の社会主義ではなく、資本主義から社会主義への過渡的な体制であると考えていた¹²⁾。ソビエト体制が、社会主義でもないのは、共産主義に

12) 「ロシアは資本主義の鎖の中でもっとも強い環ではなくて、もっとも弱い環であった。今日のソ連は世界の経済水準を越えようとしているのではなく、資本主義国に追いつこうとしているにすぎない。その時代としてもっとも進んでいる資本主義の生産諸力の社会化を基礎として形成されるはずであったような社会をマルクスが共産主義の低次の段階と呼んだとすれば、技術、生活用品、文化の面で今日なお資本主義国よりずっと貧しいソ連には、この規定は明らかにあてはまらない。したがって、矛盾だらけの今日のソヴェト体制は、社会主義体制ではなしに、準備的な体制、もしくは資本主義から社会主義への過渡的な体制と呼ぶほうが正しい。」

において消滅していると考えられている国家と貨幣の消滅への傾向が見られないからである。またソビエト体制は、資本主義と社会主義の中間形態であるが故に矛盾を含んだ体制であるとも主張していた¹³⁾。彼は、すでに1936年にブルジョア世界にいる「ソ連の友」たちに対して、「十月革命のまえに、また十月革命につづく時期に、それらの人々は、ないしそれらの人々の精神的祖先はだれも、社会主義がいかなる道をたどって世にあらわれるかについてまじめに考えたことはなかった。それだけにかかれらは、ソ連に現に存在するところのものを社会主義として認めることが容易にできるのである¹⁴⁾」と、現状を追認しただけの人々を暗に批判した。今日の状況から見れば、彼の主張は首尾一貫しているといえる。現存社会主義崩壊後、彼の主張を取り入れる人たちが増えているが、それまで、トロツキーは異端であったことを考えれば、トロツキー自身の主張の首尾一貫性がより一層際立つのである。

今日、ソ連の社会主義を社会主義でないと論じる人々の中には、ソ連の体制を「国家資本主義」と呼ぶ人たちもいる。もちろん、これは国家が単に、国営企業を所有・運営することを指しているのではない。現存社会主義体制下では国家がすべての生産手段を所有しており、個々の商品について独占が存在していたことから、ソ連の体制を国家独占資本主義と呼ぶ方がふさわしいと思われるが、これまで国家独占資本主義が西側資本主義の高度な段階を指すのに使われてきた経緯から、これと区別する意味で国家資本主義という名称を使うことにする。

現存社会主義を国家資本主義といった一種の資本主義と規定する見方は、確かに一つの知的冒険ではあるが、そこには色々な問題点がある。まず、国家資本主義体制において、シュンペーターが資本主義体制の「制度的骨組み」と呼んだ私有財産制度と契約の自由の両者がともに否定されていた。前者に関しては、生産手段の所有は、例外はあるものの、国家のみに認められ、個

L・トロツキー [18] 70ページ。

13) L・トロツキー [18] 318-319ページ。

14) L・トロツキー [18] 15ページ。

人による所有は否定されていた。さらに契約の自由も計画経済のもとでは、やはり例外はあるものの、原則として認められていなかった。もちろん、完全に自由な社会もこの世に存在しなければ、完全に不自由な社会も存在しない。それ故、資本主義と国家資本主義の差は程度の問題であると主張することは可能である。だが、建前上それが認めれない社会と、認められている社会とでは本質的な差異があるといわざるをえない。

これに関連して、現存社会主義を資本主義の一つと規定すると、なぜ冷戦のように体制間の対立が生まれたのかを説明することができなくなる。つまり同じ資本主義でありながら、体制的に両立することが不可能であったのはなぜかという疑問に答えなければならなくなる。

両体制の根本的な対立は、私的所有権を全面的に認めるか否かにある。資本主義体制において、財産権、所有権は、基本的人権の一つであり、最大限の尊重を要求する権利の一つであった。他方、先にも述べたように、現存社会主義体制においては、生産手段の私的所有は原則として認められていなかった。つまり所有権は重大な制限を受けていたのである。この点において両者は決定的に異なり、体制間の相違・対立点となったのである。

それ故、これは単なる資本主義諸国間の対立とは質的に異なっている。東西両陣営の対立する冷戦において、ある陣営から他の陣営に移ると言うことは、経済体制の革命的变化、すなわち私的所有の廃止を伴うものであったからである。また周知のように、現存社会主義体制では、価格は稀少性の指標ではなく、単なる取引上の計算単位であった。価格は人為的・恣意的に決定されており、そのために超過需要（行列）と超過供給（滞貨の山）が至るところで見られたのである。

さらに、この価格の歪みによって、合理的計算が不可能となり、利潤概念の存在余地が消滅したことはすでに述べたが、シュンペーターによれば、このような合理的計算こそ、資本主義の根本をなす経済合理主義の基礎を形成しているのであって、この合理計算なしに、経済的合理性さらには資本主義は成立し得ない¹⁵⁾。このように、資本主義体制がもっていなければならない

諸条件を国家資本主義は満たしていなかったのである。従って、この両者を資本主義という同じ範疇でくくることは余りにも乱暴であるといわざるを得ない。

最後に、現存社会主義を国家資本主義と規定すると、これまで社会主義革命といわれたロシア革命はいったい何だったのかという問題が残る¹⁶⁾。これらの体制が社会主義でなく、国家資本主義であるとすれば、1917年のロシア革命は、ブルジョア革命で、この革命によって、ロシアは一挙に高度な生産力を持つはずの国家資本主義にまで跳躍したことになる。これはあまりにも突飛な解釈でありとても受け容れることはできない。

もしロシア革命がブルジョア革命であるとするならば、1991年のソ連解体はいったい何だったのか。M・メイリアが「大崩壊」と呼ぶ、この革命に匹敵する体制転換をどう歴史的に位置づけるのかという問題が残る。この体制転換の中で、共産主義イデオロギーは否定され、政治・経済体制は大きく変化した。それとともに、これまでソビエト社会を支えてきた党、計画経済、政治警察などが徹底的に否定されたのである¹⁷⁾。これは単なる政権の交替とはいえない。イギリスにおける保守党と労働党の政権交替によるストップ・アンド・ゴー政策とは本質的に異なる大変革であることは明らかである。もし現存社会主義が国家資本主義であるとするならば、国家資本主義で革命が起こって普通の資本主義になったということになるが、それではなぜ資本主義体制のなかで二回も体制変革となる革命が起こったのか。この問いに答え

15) シュンペーター [11] 193ページ。

同様のことをミーゼスも述べている。

「自由市場がなければ、価格メカニズムは存在せず、価格メカニズムがなければ、経済的計算も存在しない。」

B. Caldwell [7] p.1859.

16) これまでに、1917年の「二月革命」をブルジョア革命であるとし、その後起こった「十月革命」を社会主義革命と解釈することもあったが、この場合でも、この二つの革命の間のわずか八ヶ月間にロシアが資本主義から社会主義に到達できるほどの生産力の上昇があったということになり、理論的には相当な飛躍がある。現在では、十月革命は、レーニンらによる一種のクーデターであるとする見方が主流となっている。

17) M・メイリア [33] 33ページ。

ねばならない。だが現存社会主義＝国家資本主義論からこの点についての明確な答えは見あたらない。またソ連の国家資本主義が、真の社会主義革命を可能にするための経済条件の整備のために必要であったとするならば、その国家資本主義が結局は崩壊して、ただの資本主義に戻ったという事実は、そのような国家資本主義のプロセス自体が不要であったことを意味する。すなわち、1917年の革命には何の意義もなく、単なる「寄り道」に過ぎなかったことになるのではないか¹⁸⁾。

本節の冒頭で述べたように、現存社会主義は一見国家資本主義という高度な資本主義体制に見える。しかし、それが崩壊した後、ロシアは普通の資本主義に戻ってしまったのである。これは歴史の後退であるだろうか。だが他方で、生産技術は現存社会主義体制下でも進歩していた。生産力が増大するなかで歴史の後退が起こることは、史的唯物論の大きな矛盾となる。それ故、これが後退でないとするならば、別の解釈が必要となる。このことから現存社会主義は、国家独占資本主義という高度な資本主義とはいえ、むしろ資本主義よりも遅れた体制であったのではないだろうかという疑問がわいてくるのである。

再版絶対主義としての現存社会主義

それではこの家産国家、または資本主義のパロディとしての現存社会主義は、歴史的にどう位置づけられるのだろうか。

世界史上、社会主義体制は、マルクスの予言したのとはちがい、先進国で成立したわけではなく、むしろ、相対的に遅れた国々で成立した。トロツキ

18) もしそうなら、バークがかつてフランス革命に対して行った批判がロシア革命にもそのままあてはまることになるだろう。

「自ら篡奪した支配権力のお蔭であればこそできたことについて彼らを認めてやり、またその支配権力を手に入れた際の犯罪を許容してやるためには、まさにそうした革命をもたらさずにはおなじ事柄が達成できなかった、ということが明らかにならなければなりません。しかし、疑う余地なくそれらは革命なしに達成できたに相違ないのです」。

E・バーク『フランス革命の省察』、ここでは、佐々木〔9〕150ページより再引用した。

一が言うように、ロシアにプロレタリア革命が起こったのは、ロシアが資本主義を基盤とした発展ができないほど後進的であったからなのである。ロシアにしても中国にしても、工業化が十分に発達する前に、戦争による混乱の中で共産党が権力を握ったのである。このことは、単なる理論からの逸脱で済まされるものではない。

これは社会主義革命が経済社会の進歩の結果なのではなく、むしろ、その社会の後進性の証明であることを示しているのである。そしてさらに、現存社会主義体制は、資本主義体制の後退によって生まれた体制であり、それは「再版絶対主義」と呼ばれるべき特徴を持っている。

かつて西欧で、農奴制が解体し、資本主義への前段階に移行しようとしていた同じ時期に、西欧よりも経済的に遅れていた東欧では、農奴制が崩壊するのではなく、逆に農奴制が強化される形で新たな農園経営が成立した。これを「再版農奴制」と呼ぶ。これと全く同じ事が、社会主義国でも起こったのである。つまり絶対主義から資本主義に移行するときに、経済的に遅れていた地域では、資本主義へ移行することができず、逆に、絶対主義体制強化という形が現れたのであった¹⁹⁾。

つまり現存社会主義とは資本主義以前の体制であった絶対主義の変形なのである。また社会主義革命とは、絶対主義的性格を持った反動的な革命であったのである。かつて毛沢東を批判して亡命に失敗・死亡した林彪や1997年2月12日に北朝鮮から亡命した主体思想の理論的指導者である黄長燁も中国や北朝鮮の体制を「封建主義」と呼んでいることが、現存社会主義の実態を表している。ヤコブレフも、社会主義を「復元された封建制」と呼んでいる²⁰⁾。人によってはこれを「国家奴隷制」と呼ぶこともある²¹⁾。だが、現存社会主

19) ロシアの経済的後進性は、農業革命の普及を見てもわかる。メイリアによると、三圃制が西ヨーロッパで起きるのは十二世紀だが、それが中央ヨーロッパに普及するのは十四世紀、モスクワ大公国に広がったのが十五世紀半ばのことであった。商業都市ができたのも十六世紀になってからであり、これが重要になるのは十九世紀のことである。このように、ロシアの経済基盤は相当に遅れていた。

M・メイリア [33] 109ページ。

20) A・ヤコブレフ [34] 115ページ。

義体制を少し分析すれば、この体制は封建主義ではなく、中央集権的な絶対主義体制の特徴をより多くもっていることがわかる。絶対主義の特徴は、王権神授説によるイデオロギー上の正統性の主張、官僚制、そして常備軍の存在であると言われているが、現実の現存社会主義体制はこれらの特徴の全てを備えている。そして帝政ロシアとソビエトロシアを比較すれば明らかなように、再版絶対主義は、絶対主義よりも過酷で残虐な支配であった。

それでは、具体的に絶対主義と現存社会主義の類似点を挙げておく²²⁾。まず権力の正統性は、絶対主義王権が王権神授説という疑似イデオロギーによって支配の正統性を得ようとしていたのに対して、現存社会主義体制は、キリスト教ならぬ共産主義イデオロギーという価値体系によって支配の正統性を構築していた。またスターリン、毛沢東、金日成などを見れば明らかであるように、指導者の多くは神格化され、生前においては無謬な存在として絶対的権力を握っていた。共産主義という一見合理主義的なイデオロギーの中

21) 例えば、リュシアン・ローラは、ソ連の定義の中で次のように述べている。

「ロシアにおいては、私的であれ、国家的であれ、資本主義は存在しない。そこでは、生産手段は、それを運営し、さらにそのうえ、労働者たちを支配者然として自由に使用するビューロ＝テクノクラシーの手に握られている。労働者たちは、いかなる自由もなく、広大な領土の端から端へ押しやられるのであり、奴隷状態と同じ状態の中にある。カール・カウツキーは、このシステムを、『奴隷国家制』と呼んだ。われわれは、この定義に同意するものである。」

桜井哲夫 [8] 169ページ。

22) ソビエト体制と帝政ロシアとの間に類似点が多々あることについてメイリアは次のように述べている、

「昔のロシアには、16世紀末から1861年の農奴解放まで、奴隷制と等しい農奴制があった。それは、ヨーロッパのどこの国よりも長期にわたる過酷な形態のものだった。ソヴィエト・ロシア時代になると、集団農場制という、新しい形のまた別のもっとひどい搾取型の農奴制がくり広げられた。昔のロシアには、反体制派や政治犯をシベリアの凍土地帯に追放したが、新生ロシアもスターリン時代の「グラーク〔強制労働収容所総管理本部〕」においても同じことが行われた。つまり、昔のロシアの不変的な政治体制は専制政治で、イワン雷帝やピョートル大帝時代には、専制的で時にはまったくばかげた上からの革命がその歴史的発展の節目をつくってきたのだ。新生ソヴィエトの専制政治は、スターリンによる上からのさらに恐ろしい革命によってその極みに達した。ということは、ロシアはその歴史上ずっと、「東洋的専制国家」だったのであり、ヘーゲルのいう「自由を求める歴史」をもった欧米の国々とはまったく別の世界である。」

M・メイリア [33] 101ページ。

で神格化という合理主義からは一番無縁なことが起こったのである。ドラッカーはいう、「全体主義に神は存在しない。しかし、全体主義は自らの矛盾を解くために、悪魔、超人、魔術師を必要とする。ここにおいて、邪を正、偽を真、幻を現実、空虚を実体に変えるために、「指導者」が必要となる²³⁾。」彼の全体主義に対する分析は、そのまま現存社会主義にも当てはまるのである。神の代わりとして登場した指導者がそのまま神格化されるのは当然の成り行きであろう。

現代の専制君主達は、新たに支配のための強力な手段を手に入れた。それはイデオロギーである。彼らはイデオロギーに基づく神政政治を考案したのである。人民を思想的に支配することで、現実の支配をよりいっそう強固にすることができたのである。「神のものは神に、カエサルのはカエサルに」というのがキリストの言葉であるが、現代の専制君主達は、人々の精神も生活も支配する術を知ったのである。まさに「神のものはカエサルに、カエサルのももカエサルに」を実践したのであった²⁴⁾。スターリン、毛沢東は、社会主義イデオロギーに、金日成はそれを少し翻案した主体思想に、ヒトラーは人種主義にそれぞれ依拠して人々を洗脳し、思いのままに操ったのである。イデオロギーによって正統性を付与された政治体制は強固であり、北朝鮮に見られるように、少々の経済破綻があっても体制がただちに崩壊することはない。

そしてその社会の運営は、実質上の支配者である官僚によって行われてお

23) P・ドラッカー [19] 224ページ。

24) その意味で、これらの指導者は、ニーチェの言う「真の哲学者」の歪んだ一変種であったということができるかもしれない。ニーチェは、理想的な支配形態として、プラトンの哲人政治のようなものを考えており、そこでは「真の哲学者」が価値創造者、立法者として「善悪の彼岸」に立ち、人びとを支配するのであるが、それは外面的には、現存社会主義において実現されたのである。これら善悪の彼岸に立った支配者たちがもたらした悲劇についてはもはや語る必要はないであろう。なお、ニーチェ自身は、このような専制的支配者の出現を民主主義の帰結であると考えていた。歴史を見るかぎり、ニーチェの言う「真の哲学者」は出現せず、専制的支配者のみが現れたのであった。

F・ニーチェ [20]

り、党官僚は特権階級となっていた。現存社会主義体制における官僚は、資本主義体制における経営者・管理者の機能を担っていたが、株主やメインバンクが監視役として存在する後者とは異なり、前者は何の掣肘も受けない、まさに「神聖ニシテ冒スヘカラス」存在であった。党員と非党員、高級幹部とそれ以外の幹部との間には厳然とした差別があり、それは身分といって良いようなものであった。出身成分が重要視され、地主階級の出の者は色々な差別を受けた。このように現存社会主義体制においては、実質的なカースト制が取られていたのである。このように、現存社会主義体制のノメンクラトゥーラと資本主義体制の官僚・経営者・管理者とはその機能も異なっており、世襲化の点でも両者は全く異なった存在であって、両者をビューロ＝テクノクラシーという同じ範疇にくくることはできない。

現実の社会主義体制は、比較的短期間で滅亡したために、権力継承ルールが確立されずに終わった。そのため、権力者が一旦権力を握ると終生それを保持し、権力者の交代は、彼の死を待つしかなかった。そして一旦権力者が死去すると、次の権力者を決定するための熾烈な権力闘争が展開されたのである。つまり現存社会主義においては、平和的な権力委譲のルールは存在しなかったのである。この点においても、現存社会主義は先進資本主義国よりも後進的であったといえることができる。

さらに驚くべき事に、現存社会主義国では、権力の世襲という前近代的な権力の委譲が見られたのである。北朝鮮では、金日成から長男の金正日への権力の世襲が実行された。同様の試みは、ルーマニアのチャウシェスクも行おうとしたといわれているが、ルーマニアの場合には、世襲が行われる前に体制自体が崩壊したので未遂に終わってしまった。権力の世襲が行われるような社会は、いかに言い繕おうとも、近代的社会とはとてもいえない。

また現存社会主義諸国は有数の軍事大国であり、資本主義諸国より多くの資源を軍備に費やしていた。ソ連は、他のほとんどの点でアメリカの後塵を拝していたが、唯一、軍事面においてはアメリカに匹敵するほどの実力を有していた。つまり軍事力だけは突出していたのである。核爆弾や大陸間弾道

弾といった最新兵器に関してもアメリカに若干遅れてはいたものの、質的劣勢を量的な優位でカバーできていた。中国もまた、核戦力を有する地域軍事大国である。北朝鮮の核開発が近年国際問題となったことは記憶に新しいところである。かつてキューバや東ドイツは、アフリカを中心とする第三世界に軍隊を派遣して、米ソ代理戦争の先兵となっていた。現存社会主義国における軍の政治・経済的比重は、先進資本主義国に比べて格段に高かったことは明らかである。

最後に、現存社会主義体制における人権の抑圧はこれらの社会が進歩的とは似ても似つかぬ社会であったことを示している。

このように、現存社会主義体制を絶対主義体制の生まれ変わりにとられれば、北朝鮮やルーマニアにおける権力の世襲という前近代的な行為も当然のこととして納得されるのである。またこれらの諸国において生産力の増加とともに、社会的諸矛盾が激化して社会体制の変革が起こり、その結果資本主義体制になっていくのも「歴史的必然」であることがわかる。なぜなら、現存社会主義は資本主義よりも一段遅れた体制であったからなのである。

現存社会主義体制における市場経済の否定は、価値法則の貫徹を成立させるための社会条件が現存社会主義諸国には未だ生まれていなかったからであると考えられる。そのために、現存社会主義諸国は、計画経済と不完全な市場経済の併用を余儀なくされたのであった。それはあたかも絶対主義体制において、種々の特許や免許、独占のために資本主義システムがその力を十分に発揮できなかったのと同じことが現存社会主義でも起こっていたと見ることができる。さらに北朝鮮では、現在経済計画すら立てられておらず、マクロ経済の調整が放棄されたままになっている。これでは、近代社会の体すらなしていない状態であるといわれても仕方がない。

資本主義批判として、しばしば、その経済の不安定性が指摘されるが、不安定性だけならば、現存社会主義体制の不安定さは、近代以前の性質をもっていた。近代以前の経済は、循環的変動を特徴としており、趨勢的な成長は起こらなかった。現存社会主義体制では、総生産高の大幅な後退がみられた

が、これは資本主義諸国では決してみられなかったことである。これは現存社会主義体制の生産力が低いことを意味しており、現存社会主義体制が資本主義体制よりも後進的な体制であったという証拠でもある。

成功ゆえの崩壊

このように見れば、現実に存在した社会主義体制は、当時の帝国主義列強の中では相対的に遅れた経済が、先進資本主義諸国にキャッチアップするために、生産力を急速に増加させる体制として成立した再版絶対主義体制であったといえる²⁵⁾。これは一種の「開発独裁」体制であった。これはガーシェンクロン命題のさらなる発展型であったといえる²⁶⁾。ガーシェンクロンは、日本やロシアのような後発国の経済発展には国家の役割が重要になると主張したが、ロシア革命後の社会主義体制の成立は、国家の役割が究極の形で展開されたのであった。すなわち、国家が生産システムの唯一の主体として現れたのであった。

この歴史評価に従えば、ロシア革命は、「絶対主義革命」であり、その結果生まれた絶対主義的体制がソ連帝国であったのである。ロシア革命が、ブルジョア革命であるとか、プロレタリア革命であるという説は、理論と現実を混同している。確かに現実の問題として、革命は起こった。だが、これがブルジョア革命とすることはできない。なぜなら、当時のロシアは工業化の初期局面にようやく達した段階であり、ブルジョア階級なるものが成長していなかったからである。ブルジョア階級がないのにプロレタリア階級があるはずもない。当然これはプロレタリア革命でもない。革命の指導者たちは、確

25) 最初の社会主義革命を経験したロシアが世界的に見て後進的な経済であったわけではなく、イギリス、フランス、ドイツといった当時の帝国主義列強に比べれば、相対的に遅れてはいたが、それでも1914年までに国民総生産ではアメリカ、ドイツ、イギリス、フランスに次いで世界第5位の経済大国であった（もっとも1人当たり所得で見ればヨーロッパでは最低レベルにあった）。だが、同時にロシアは、これらの帝国主義列強と軍事的にはライバル関係にあり、工業化の必要性はもっとも大きかったのである。

M・メイリア [33] 121ページ。

26) A. Gerschenkron [6]。

かに、マルクス主義の信奉者であった。だが、だからといって彼らの行った革命が社会主義革命であると即断するのは誤っている。歴史的評価は、あくまでも、その結果によって評価されねばならない。その結果、生まれた社会体制が何かによってその革命の性格は規定される。

現存社会主義が絶対主義的性格を持った体制であることはすでに述べたとおりである。絶対主義体制をもたらす革命は絶対主義革命であり、それ以外のものではない。ボルシェビキは、戦争とそれによって引き起こされた飢饉で社会的不安が高まるなか、ロシア帝政の暴力装置である軍隊をコントロールすることで革命を成功に導いたのである²⁷⁾。そこには、マルクス理論から革命の要素として当然要請される生産力の発展という要素はどこにも見あたらない。そして革命後、生産力に基づいて社会制度を構築したのではなく、共産主義というイデオロギーに沿って社会制度を「上から」押しつけたのである。つまり上部構造が下部構造を規定したのである。その意味でソビエト社会は、「倒立」した社会であったといえる²⁸⁾。

そしてこの体制の下で生産力の発展が図られ、当初の目的通りに生産力は飛躍的な発展を遂げたのであった(表Ⅰ参照)。それ故、現存社会主義体制は、後発国のキャッチアップシステムとして有効であったといえることができる。それは、ロシアが革命によって社会主義体制となり、五カ年計画を強力に押し進め、これによる工業化の成功によって、対独戦を勝ち取り、第二次世界大戦後は、アメリカに対抗する超大国として東側世界に君臨したという歴史が証明している。このような発展は、ロマノフ朝下のロシアでは想像もできなかったことである。

その一方では、粛清をはじめとする数々の人権抑圧が行われ、政治的・社

27) 「レーニンは、ボルシェヴィキが「①プロレタリアートのあいだで圧倒的多数を握っていたこと、②軍隊内ではほとんど半数を握っていたこと、③決定的な時機に、決定的な地点で、すなわち両首都と、中央に近い戦線とで、勢力の圧倒的優位を占めていたこと」(『憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁』)を十月革命勝利の三つの条件にあげた。」

大谷禎之介・大西広・山口正之 [4] 185ページ。

28) M・メイリア [33] 23ページ。

表 I ソ連の初期五カ年計画の成果

	1913 年	1935 年
重工業生産(1913 年 = 1)	1	5.6
電力(10 億キロワット時)	2.0	26.3
原油(100 万トン)	10.3	25.2
石炭(100 万トン)	29.2	109.6
鉄鉱石(100 万トン)	9.2	26.8
鋼鉄(100 万トン)	4.3	12.6
紙(1000 トン)	269.2	640.8

原出典)『ソ連国民経済 70 年記念統計年鑑』(産経新聞「20 世紀特派員」取材班『20 世紀特派員』産経新聞社 1997 年 97 ページより再引用)。

会的には人々は大きな苦難を耐え忍ばねばならなかった。だが、500万人にも上ると言われる大粛清のさなかに急激な工業化が進んだことも事実なのである。まさに、ソ連型発展システムとは、莫大な物的・人的資源（人命をも含んだ）を犠牲にしたキャッチアップ方式であったといえよう。

そしてこの莫大な犠牲を払って達成した生産力の発展もやがて頓挫するようになる。ソ連経済は、1950年代に年平均10%の成長を達成した後、徐々に停滞の度を深めていった。1960年代には7%，1970年代には5%，1980年代には2%と経済成長率は低下し続け、1990年代に至るとマイナス成長となった。それでは、投資も減少しているのかというと、これら全期間にわたって投資率は逆に上昇しており、GDPに占める投資シェアは、1950年の15%弱から1990年には30%強へと上昇しているのである。それと同時に、投資収益率は低下し続け、1970年代後半からは投資収益率はゼロ状態になっていた²⁹⁾。

ソ連の経済成長の源泉は、生産要素の投入増加にあったことはよく知られ

29) 世界銀行 [13] 2-3ページ。

ている。先進資本主義国の場合には、総要素生産性が経済成長の主たる動因であったのとは対照的に、ソ連経済は、資本や労働の投入増加によって経済が成長していたのであった。その意味でソ連経済は、革新の可能性が枯渇し、投資機会が消滅して、企業者つまりブルジョアが排除されることによって資本主義が崩壊した後シュンペーターが成立すると考えた社会主義と共通の特徴を持っているといえよう。シュンペーターは、社会主義においては、進歩は緩慢で自動機械化すると考えていたが、ソ連経済では、軍事部門という重大な例外を除いては、そのような進歩の自動機械化は起こらなかった。生産部門での進歩がなく、経済成長の源泉が生産要素投入の増加だけの成長パターンをとれば、やがては収穫逡減によって成長率が低下していくことは避けられない。つまり現存社会主義経済は、ある程度まで量的拡大はするものの、生産力の壁にぶつかってしまうのである。すなわち、これらの諸国は、社会主義的成長の限界点である極相（climax）に到達してしまったのであった。

そしてその社会主義的発展の極相において、社会的諸矛盾が激化し、社会体制を維持することが不可能となって、1991年に体制転換が行われるのである。それ故、1991年の「革命」は、ブルジョア革命であり、これによって、ソ連はようやく資本主義の段階に達したのである³⁰⁾。他方、中国のように、開発独裁は続けながら、計画経済を放棄し、経済的には資本主義へと転換した社会もある。ベトナムもまた中国型の経済システム転換を模索している。このように、現存社会主義から資本主義への遷移パターンにはいくつかの型が観察される。

このような社会主義における発展の結果、生産組織も変化し、膨大な中間

30) トロツキーは、ソ連における官僚絶対主義に対する補完的革命を予想していた。彼の予想通り、革命は起きたのだが、それは社会主義革命ではなく、ブルジョア革命であったという点で、彼の予想は外れたということが出来る。

「しかし実は現実は今度も理論が期待していたより複雑であった。後進国のプロレタリアートが最初の社会主義革命を遂行するという運命を負わされた。あらゆるデータから判断して、プロレタリアートはその歴史的特権に対して第二の、補完的な革命——官僚絶対主義にたいしての——をもって報いなければならないであろう。」

L・トロツキー [18] 360ページ。

管理層が生まれたのであるが、中間管理層の出現は何も資本主義体制に限られるものではなく、社会主義体制でも起こったのであった。それが官僚主義に変質したのである。それ故、社会主義も変質したとすることができる。その意味からも、ドラッカーの言うように、「スターリン主義は社会主義ではない。しかし、それは反共主義者が言うような単なるスターリンの権謀でもない。革命につづく必然が社会主義を不可能にただけである³¹⁾」ということもできよう。なぜ社会主義が不可能になったかについては後述する。

資本主義の変貌

このように、社会主義体制とは、マルクスの予言とは異なり、資本主義の発展型ではなく、相対的に遅れた社会の変化に対する対応としてあらわれたのであった。これはマルクスが分析対象とした資本主義が、単純労働を基礎とする初期の資本主義であって、彼が主張した資本主義の矛盾や危機は、相対的に遅れた資本主義の問題であったことを示唆する。

速水佑次郎は、近代経済成長プロセスは、二つの異なるパターンにわけることができるとしている。即ち、第Ⅰ局面と呼ばれる初期工業化局面と、第Ⅱ局面と呼ばれる高度工業化局面では、異なる成長パターンが現れており、これは先進国の歴史的経験にも適合するばかりではなく、現在の新興工業国にも適合するとしている。速水は、第Ⅰ局面をマルクス・モデル、第Ⅱ局面をクズネッツ型成長と呼んでいる³²⁾。

速水は、第Ⅰ局面において、資本の急速な蓄積にもかかわらず利潤率が低下しないために、分配率は資本に有利になるとしている。これがマルクスモデルの対象となった発展プロセスの特徴であるが、マルクスと異なる点は、利潤率が低下しないというところである。これは速水によれば、マルクスのいう利潤率低下傾向は、必然的なものではなく、技術進歩によって労働単位当たりの産出が増加し、剰余価値率が上昇すれば、利潤率の低下は回避され

31) P・ドラッカー [19] 37ページ。

32) 速水佑次郎 [22] 150ページ。

るというのである³³⁾。

もし、マルクスモデルにおいて、技術革新がなく、生産性が低いままにとどまれば、収穫逦減によって、利潤率は低下し、それを分配の変更によって補おうとすれば、必然的に労資は対立する。賃金が最低生存水準に止まっておれば、このような賃金・利潤の分配率の変更は、労働者にとって死活問題となり、革命も起きるであろう。

実際には、革命は、戦争などの外部からの攪乱要因が働いて勃発するのであるが、革命が成功した社会というのは、すべて生産性が低く、人々の生活水準の低い国であった。このような社会で、戦争や飢饉といった外的要因で生活水準がさらに低下するとき、既存の秩序を破壊する衝動が起きるのは、やむを得ないことといえる。

そして皮肉な事に、革命の原動力となるイデオロギーは、マルクスが先進工業国に対して適合するとした考え方なのである。つまりその社会の生産力の水準とは関わりなく、上部構造たるイデオロギーが外部からもたらされ、その強力な影響力のもとで、革命が起こり、社会構造が大きく変質したのであった。いうならば、マルクスは、自らの思想の持つ影響力の甚大さのために、自らの予言を覆されてしまったのである。マルクス主義は体制変革のための強力な思想的梃子となり、彼自身のもくろみとは関係のない方向へ一人歩きしたのであった。そして革命が現実起こったのは、もともと生産力が低く、そのため社会情勢が不安定な諸国だったのである。

したがって、社会主義革命が起こるのが相対的に遅れた国に限られることは、これによって説明できるのである。他方、資本主義が進んだ国では、技術革新の結果、単純労働から脱却し、人的資本が重要になる一方、貯蓄の主体が資本家階級から労働者階級に変化し、その結果として、生産手段の所有者が資本家階級だけでなく、労働者階級を含む国民一般に拡散するにつれて、マルクスの分析枠組みの有効性は失われるのである。

33) 速水佑次郎 [22] 151ページ。

そして現存社会主義が、中国に見られるように、生産手段の私有も認めるようになれば、ほとんど開発独裁と変わらなくなっていく。このような変化も、革命を伴わない、絶対主義から資本主義への遷移と見ることができる。これは生産力の成長最大化のためには、ある発展段階では社会主義が有効であり、生産力がある程度進んだ段階に達したとき、社会主義から資本主義への展開が有利になることを示している。

このように、現実の社会主義には色々な問題があったことは認めなければならないが、社会主義体制の下で、ソ連や中国は、前近代的社会から生産力を飛躍的に発展させたのであり、資本主義に移行するための基礎的条件を作り上げたことは評価されねばならない。これらの諸国で社会主義体制が崩壊・変質したからといって、現存社会主義の意義を完全に否定することは明らかに誤っている。それは単なる既成事実の追認にしか過ぎず、トロツキーが60年も前に批判したことなのである。

マルクスの予言にも関わらず、1930年代の大不況以来、特に第二次世界大戦後50年以上にわたって、資本主義体制が体制的崩壊の危機に立つほどの大きな経済困難に直面したことはなかった。もちろん、資本主義をはじめとして人間社会は完全なものではあり得ない以上、資本主義にも多くの欠点が指摘されてきたが、それらは体制を崩壊させるほど重大なものではなかったのである。他方、生産力の増加は進展し続け、人々は窮乏化するどころか、生活水準の飛躍的向上を経験したのである。

このように、これまでの歴史的経験を見れば、マルクスの展望が誤っていたことは明白なのである。これ以上の生産力の発展が、果たして革命に導く窮乏化をもたらすのだろうか。現実はこれと全く逆のことが起きている。資本主義社会において、これまでの生産力の発展は、むしろ人々の生活水準を向上させ、社会をさらに安定化させてきたのである。

共産主義社会では生産力は無限に大きくなっているはずであるが、それ以前の社会、つまり生産力が共産社会ほどではないが十分に大きくなっている社会で、なぜ人々が窮乏化し革命が起きねばならないのか。そこには埋める

このできないほど大きな理論的断絶がある³⁴⁾。つまり、歴史的経験は、現実の経済社会が理論的予想とは異なる変化を遂げたことを示しているのである。現実の資本主義体制は、マルクスが予想しなかった変容を遂げたのである。

後期資本主義

1920年代に資本主義諸国で起こった恐慌に対応して、ドイツ、イタリア、日本では、ファシズムと呼ばれる全体主義体制が成立し、アメリカでは、1930年代にニューディール政策という民間経済に対する国家の大規模な介入が行われた。これらは、すべてこれまでの資本主義生産様式に対するアンチテーゼとして唱道されたものであった。特に、ファシズムの中には、社会主義的要素が多く含まれていた。例えば、私的所有の制限、計画経済、国家の役割拡大である。これらの体制が本質的に戦時体制であったことは、ソ連のスターリン主義の源が戦時共産主義という戦時総動員態勢であったことと共通している。その意味では、第二次世界大戦中は、全ての主要国が戦時総動員態勢に転換しており、体制としては収斂していたと見ることもできよう。

そしてその後、資本主義諸国では、巨大な政府部門を抱える混合経済体制が成立したことは、1920年代から第二次世界大戦にかけて、資本主義体制が大きく変質したことを意味している。この時期に成立した混合経済を後期資本主義、それまでの資本主義を前期資本主義と呼ぶことにする。

後期資本主義の一つの特徴は、生産規模拡大から生じる寡占・独占的競争の進行である。だが、そのこと自体は、社会に大きな弊害をもたらさなかった。これは通常の経済理論とはまったく正反対の出来事であった。マルクス

34) ヤコブレフも、マルクスが『共産党宣言』の中で、労働者階級を伝統的社会の崩壊の産物として、また所有権、家族、未来への希望を奪われた社会層の産物として描いているにもかかわらず、この階級が社会主義社会と言うより完全な社会を建設するために必要な精神力と理性を持ちうるというのは矛盾していると指摘している。

A・ヤコブレフ [34] 95ページ。

経済学でも、ミクロ経済学でも、寡占などの競争制限的な経済構造は、社会に何らかの致命的な弊害をもたらすとされている。ところが、現実の寡占・独占的競争は、むしろ高い経済成長をもたらしたのである。この経験的事実は、明らかに、シュンペーターが指摘した静態的経済理論の限界を示しているといえよう³⁵⁾。現実の経済が、完全競争とはほど遠い競争条件の下でなお高い経済成長を遂げたことは、経済学における競争概念の再定義を必要とすることを意味している。

戦後の先進資本主義国の繁栄が、資本主義体制内部の自己革新によって達成されたことは特に銘記すべきであろう。前期資本主義では、経済成長が外延的な形態をとり、植民地獲得、すなわち帝国主義的政策の追求が経済成長と共に行われていたのに対して、後期資本主義では、そのような外延的發展形態はとられなかった。むしろ、第二次世界大戦の結果、中国や東欧などがソビエトブロックに属したことで資本主義諸国にとって大きな市場が失われ、また植民地諸国の独立によって、排他的経済圏も消失し、そのうちのいくつかは東側につくことによって資本主義市場から離脱したのであった。

これに関して、後期資本主義の対外関係を「自由貿易帝国主義」とよぶものもあるが、これは全くの形容矛盾でしかない。もし後期資本主義の繁栄が、周辺国の収奪によって成り立っているとすれば、第二次大戦後に生じたこれらの市場の喪失は、後期資本主義にとって致命的ダメージを与えたはずである。ところが、経済的に停滞したのは、東側ブロックに属した経済の方なのであって、中心国に「収奪」されているはずのアジアの新興工業国は、未曾有の経済発展を遂げたのである。

従属理論は、現実と理論の混同によって成り立っている。従属理論は、貿易における不等価交換を仮定して、現在の発展途上国（周辺）と先進国（中心）の格差をアドホックに説明するだけであり、そのような関係が生じたプロセスを説明できるわけではない。つまりなぜある国が周辺になり、別の国

35) J・A・シュンペーター [11] 127ページ。

が中心になるのかを理論的に説明することはできない。同じことは帝国主義論にもいえる³⁶⁾。ただ現在だけを説明し、過去の説明のできない議論は、未来も予測することはできない。現在をアドホックにしか説明できない議論から生まれるすべての政策的インプリケーションも所詮アドホックであり、一般性をもたないからである。

従属理論や帝国主義論の主張とは異なり、先進資本主義国にとって最重要の貿易相手国は、一次産品を輸出する途上国ではなく同じ発展段階にある先進資本主義国であった。同一製品を取り引きする水平貿易、つまり産業内貿易の方が異なる産業間の貿易、つまり産業間貿易によりも重要であったのである。このように、前期資本主義に比べて後期資本主義は、周辺国に依存せず、自国または後期資本主義グループ内部での自己革新によって市場を拡大し経済発展を遂げたのであった。

第二次世界大戦後、未曾有の経済的繁栄を謳歌した後期資本主義の特徴の一つが政府部門の拡大であり、このような政府部門の肥大化の理論的バックボーンとして貢献したのが、ケインズ経済学であった。ケインズ経済学が主張する総需要管理政策は、資本主義に内在する無政府的生産を需要面からコントロールするものとして、戦間期から資本主義諸国で採用され、それなりの成果をもたらした。だが、このことは、ケインズ経済学が正しかったことをそのまま意味するものではない。ケインズ経済学の前提になっているのは、「有効需要」の不足である。有効需要とは、購買力の裏付けのある需要のことであり、資本主義における不況の原因は、所得不足による購買力が不足することから、需要が供給に比べて過少になり、これが不況を引き起こすのだとケインズ経済学では考える。そこで、政府がみずから需要者となって財政支出を増加させ、人々の所得を上昇させて、有効需要を喚起すれば、不況は克服できるというのである。

このような有効需要の不足という事態は、非常に特殊な状況であると考え

36) 帝国主義論も、歴史的検証にたえられないことをシュンペーターは指摘した。

J・A・シュンペーター [11] 84-86ページ。

られる。それは一方では、生産力が急速に増加するのに対して、需要がそれに見合って増えないという状況を指している。つまりこれは一時的な需給のアンバランスを指しているのである。このような恐慌の説明自体はなにも目新しいものではない。ケインズは、その原因として所得（購買力）の不足に着目したのであるが、これはいわゆる恐慌の過小消費説とよばれるものであり、ケインズ以前にも存在していた説である。彼の着目点は、この過小消費の原因を購買力不足、すなわち有効需要の不足に求めたところにある。

だが、この購買力不足から生じる過小消費説が成り立つためには色々な条件が必要である。経済が豊かになり、人々が多くの資産をもつようになれば、有効需要という概念自体が不要になる。また信用制度が発達し、人々に対して容易に信用が与えられるようになれば、やはり有効需要は問題にならない。さらに、購買力が自国になくとも、外国に購買力が存在すればよい。すなわち、自国の余剰生産力のはけ口 (vent for surplus) として輸出することは可能である。このように、不況の原因とされる有効需要の不足は、常に問題になるわけではない。生産と消費の間のアンバランスは、何も購買力の不足だけで生じるわけではなく、種々の市場の欠陥、および情報、運輸・通信その他の欠陥によっても生じるのである。もっとも戦間期における産業構造の変化は、生産と消費のアンバランスを急激に拡大させた可能性を残す。

したがって、戦間期における恐慌は、急速な生産力の増加に対して、需要が追いつかなかったという経済発展のある局面に特有な現象であったと考えることができる。そしてそこに信用の欠如、国際経済の混乱による輸出の減少といったやはり特殊な原因が重なったのである。そのような特殊な状況に適合したのがケインズ理論であった。

戦後の世界経済成長にケインズ理論がどれほど役に立ったかは大変疑問である。なぜなら、ケインズ理論の枠組み自体は、ごく短期的なものであって、長期的な経済成長を説明するものではないからである。むしろ。自由貿易体制の確立や技術革新の方が重要であっただろう。

だが、少なくとも、ケインズ理論は、戦後の先進国では非常に大きな影響

をもち、経済社会の構造を変えてしまったことは確かである。つまりケインズ理論は、「大きな政府」を正当化した。これが民主主義と相まって、各種の圧力団体が、自らの利権拡大のために活動する余地を提供したのである。政府の役割は日を追うごとに拡大された。それとともに、政府支出も拡大し、表IIに見られるように、国民経済に占めるシェアも上昇するに至った。これが資本の要求によってではなく、福祉充実や雇用拡大という国民の要求によるものであったことは強調されるべきであろう。つまりケインズ政策は、現代の民主主義にとって大変都合のよい理論的枠組みを提供したのである。これは一方では、経済的効率の低下をもたらしたが、他方では、所得再分配を通じて、人々の公正感を満足させ、社会に対する信頼を高めたという意味では、評価されてもよい。このような公共部門の比重の増加は、マルクスの予見しなかったことであった。

さらに、資本の内容も大きく変化している。現代の経済発展において、私的物的資本以外の資本の果たす役割はますます重要になっている。これまでも人的資本の重要性が指摘されてきたが、近年では、社会資本、すなわちインフラストラクチャーの果たす役割も重視されるようになってきている。社会資本はまさに社会的所有になっており、大企業などの独占資本が支配しているわけではない。このことは、日本において、過大ともいえる社会資本が地方に建設されていることから見ても明らかである。人的資本や社会資本の重要性が増加すれば、資本の私的所有のもつ意味が低下していくことになる。また産業構造自体が、巨大資本を必要とする製造業主体からサービス業を主要部門とする経済構造に転換している。今や先進国経済は、私的に所有された物的資本の集積によってのみ経済成長しているわけではないのである。

このように、私的所有権の根幹に手をつけずとも、公共部門の増大を通して、社会主義化は進展し得るし、生産手段のアソシエイト的所有も、資本市場の発達によって実現可能なのである³⁷⁾。このような経路による社会主義化

37) このような資本市場の発達を「金融資本」の成長と捉えることもできるが、その金融資本に資本を提供しているのは、労働者を含む国民一般であることを忘れて

表Ⅱ 政府部門のGNP比の歴史的推移

	1870	1913	1920	1937	1960	1980	1990	1996
オーストリア	—	—	14.7	15.2	35.7	48.1	48.6	51.7
ベルギー	—	—	—	21.8	30.3	58.6	54.8	54.3
カナダ	—	—	13.3	18.6	28.6	38.8	46.0	44.7
フランス	12.6	17.0	27.6	29.0	34.6	46.1	49.8	54.5
ドイツ	10.0	14.8	25.0	42.4	32.4	47.9	45.1	49.0
イタリア	11.9	11.1	22.5	24.5	30.1	41.9	53.2	52.9
日本	8.8	8.3	14.8	25.4	17.5	32.0	31.7	36.2
オランダ	9.1	9.0	13.5	19.0	33.7	55.2	54.0	49.9
ノルウェー	3.7	8.3	13.7	—	29.9	37.5	53.8	45.5
スペイン	—	8.3	9.3	18.4	18.8	32.2	42.0	43.3
スウェーデン	5.7	6.3	8.1	10.4	31.0	60.1	59.1	64.7
スイス	—	2.7	4.6	6.1	17.2	32.8	33.5	37.6
イギリス	9.4	12.7	26.2	30.0	32.2	43.0	39.9	41.9
アメリカ	3.9	1.8	7.0	8.6	27.0	31.8	33.3	33.3
平均	8.3	9.1	15.4	18.3	28.5	43.3	46.1	47.1

出典) *The Economist*, Sep. 20th 1997. *The World Economic Survey* p. 11.

は資本主義と矛盾しない。市場メカニズムと社会主義は矛盾しない。市場メカニズムは、私的所有を前提とはしないからである³⁸⁾。このように、資本家階級が溶解し、政府部門という非市場経済の比重の高まった資本主義経済へと資本主義体制自体が変化したのである³⁹⁾。これにともなって、労働者の所

はならない。

38) ただし、このような市場経済社会主義は、本質的に完全競争と同じく非現実的であると主張もある。

J. E. Stiglitz [12]。

39) ボードリヤールも、著書のなかで次のようにつぶやいている、

「ひょっとするとわれわれはすでにはっきりと社会主義的様式のなかにいるのではあるまいか。ひょっとすると価値の構造法則の名の下での資本の変身は、資

得も上昇し、労働時間も短縮されている。

このプロセスは、かつてシュンペーターが予想した資本主義崩壊プロセスである⁴⁰⁾。現実には、彼が予想したのとは少し異なり、資本主義が成功裏に発展を続けることによって、結果的に共産主義体制が成立する方向に動いているとすることができる。その最終状態として共産主義が成立するのは、生産力が非常に大きくなり、人間が物質的欠乏から完全に解放されたときである。生産性が非常に高くなって、賃金という概念が陳腐化すれば、すべての労働は社会化される。そこには賃労働の存在理由は消滅する。すべての労働は商品生産のためではなく、労働自体のもつ効用によって行われるようになる。財・サービスの交換は、商品の交換ではなく、互惠 (reciprocity・互酬ともいう) という形をとる。

このように生産力の増加によって資本の私的所有が意味を失い、社会全体が共産化するのである。これは、矛盾の止揚によって資本主義が瓦解するというマルクスのビジョンとは大きく異なっている。現実には先進諸国では、国民の多くが、株式をもったり、金融機関に預金をもつことを通して、直接的・間接的に生産手段を社会的に共有し、資本家階級が労働者階級に溶解しているのである。このような状況で、階級対立の図式を当てはめるのは困難といわざるを得ない。経済体制の止揚の仕方には色々なパターンがあり、常に革命というドラスティックな形を取る必然性はない⁴¹⁾。

マルクスの時代に比べて現代の生産力が飛躍的に発展したことは誰しも認めるところである。他方、資本主義がこのような生産力の未曾有の発展にも関わらず、変化していないと言うのであれば、マルクスの史的唯物論は誤っ

本の社会主義的到達点にすぎないのではあるまいか。はてさてどうしたものか！」
J・ボードリヤール [28] 33ページ。

40) J・A・シュンペーター [11] 第十二章「くずれ落ちる城壁」参照。

41) ヤコブレフは、マルクス自身の革命理論は、封建体制からブルジョア民主主義への転換となった市民革命という本来ユニークな歴史的事件をそのまま絶対化・普遍化して、独占的国家資本主義から社会主義への転換に当てはめているだけであって、この類推は役に立たないと論断している。

A・ヤコブレフ [34] 30ページ。

ているということになろう。だが、これまで述べたように、資本主義自体がマルクスの時代のそれとは大きく変貌しているのも事実なのである。その意味ではマルクスの主張した史的唯物論は正しい。だが、マルクスの予言したような発展経路はたどらず、生産関係の形式は変わらず、商品生産は未曾有の増加を遂げる一方で、所有の態様が大きく変化し、物的資本以外の資本、つまり人的資本のような資本の新しい形が出現し、インフラのような社会資本の重要性が増し、国家の役割が重要になるといった各種の変化が資本主義体制の内部に起こったのである⁴²⁾。このような資本主義体制の変容は、まさに生産力の発展に対応したものであって、社会改良主義運動の結果ではない。

政治運動としてのマルクス主義

これに対し、あくまで資本主義を根本から否定し、人々の生活向上という資本主義の成果を一切認めようとせず、すべての社会問題を資本主義の矛盾の激化と解釈し、その矛盾の最終的解決手段として、革命を主張する者は、それはあくまでも政治闘争の手段としてそれを主張しているのであって、当然のことながら、それは経済理論上の学説ではなく、政治目的を持った運動

42) 伊東によれば、マルクス自身は、このような変化を予見していた可能性もあるという。それは、彼の『資本論』第一巻第二十四章に次のような記述があるからである。

「資本制生産様式から発生する資本制的取得様式は、したがって資本性的な私的所有は、自分の労働を基礎とする個体的な私的所有の第一の否定である。だが資本制的生産は、一自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代に達成されたもの——すなわち協業や、土地・および労働そのものによって生産された生産手段の共有——を基礎とする個体的所有を生みだす。」
伊東光晴〔2〕 310-311ページ。

伊東は、これをもってマルクスが一種の株式会社形態が社会的に優位になることを予見していたと主張するが、肝心のマルクスのこの部分は有名な「資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(マルクス〔30〕415ページ)という文のあとに続いているのであって、明らかに革命後の社会の状態を指しており、資本主義内部でこのような変化が起こると言っているわけではない。

であると見るべきである。そこではマルクス主義は、政治運動体の中心的イデオロギーとなる。

権力を目指す人々にとって、現在の体制を根本的に否定するマルクス主義ほど魅力的なイデオロギーはない⁴³⁾。これを利用して、反体制勢力を結集し、既存の権力構造を破壊することが可能となる。マルクス主義を通して、運動体構成員は、価値観を同じくし、同じ政治目的を達成すべく政治運動を展開するのである。彼らは、現在の資本主義体制をあくまでも危機にあると規定する。権力を奪取するためには、当然のことながら、既成秩序は崩壊の淵に立っていないなければならない。

その口実として、先ほど批判した従属理論的国際関係が強調され、多国籍企業の跋扈が問題視され、世界経済のカジノ化が糾弾される。だが、これらの「危機」は、すべて表面上の「危機」であり、実体を伴ったものではない。これらの「危機」によって、人々の生活が破壊されたわけではないのである。世界経済が全体としては成長しており、人々の生活水準が向上していることは、平均余命などの種々のデータから明らかである。シュンペーターが指摘しているように、資本主義を擁護するためには長期的な考察が必要なのである⁴⁴⁾。短期的には、資本主義には循環的変動および成功者と失敗者の落差という拭いがたい欠陥のみが目につく。そして人々は、長期的な利益は忘れがちであり、短期的な欠陥だけを意識してしまう。そして資本主義に対する批判は、これら短期的な欠陥に基づいて行われる。

このようにして反体制派は、これまで資本主義の危機を叫んできたが、第

43) ドラッカーは、反対勢力としてのマルクス主義の限界について次のように述べている。

「〔マルクス主義は〕たしかに、反対勢力としては有力である。しかし、もっぱら反対するだけの運動は、その反対する秩序が存在して、はじめて意義と訴求力を持ちうる。批判だけが唯一の機能であるならば、社会的勢力としての社会主義は、その存在意義を資本主義の存在と妥当性に依存せざるを得ない。たとえ資本主義の信用を落とすことはできても、それにとって代わることはできない。資本主義が崩壊するならば、社会主義もまた、自らの意義と正当性を失う。」

P・ドラッカー [19] 29ページ。

44) J・A・シュンペーター [9] 226ページ。

二次世界大戦終結以来、資本主義が体制的危機に陥ったことは一度としてなかったものであり、逆に解体したのは、資本主義を敵視していた自称「社会主義」諸国であった。これが厳然たる事実なのである。産業革命によって資本主義体制が成立して以来、200年を超える年月が経過した。この間、資本主義が達成したものを冷静に評価することがそれほど難しいことであるとは思えない。われわれは、これまでの経験に基づいて将来の展望をもつべきなのである。

今日、資本主義の批判者たちが「危機」としているのは、ただそのような「危機」が人々の生活を破壊する可能性があるというものである。その点、彼らの主張は、終末論的ビジョンを提示する宗教と共通の側面をもっている。終末論にせよ、資本主義「危機」論にせよ、それらは論理的可能性に支えられた主張にすぎない。終末論を考えれば明らかなように、終末論も論理的可能性に依拠するものであるが、経験的にはすべての終末論は誤っていたのである。これは将来を予測する場合には、論理的可能性のみに依拠することは危険であることを意味している。

予測モデルが説得力を持つための必要条件として、それによって過去の出来事を説明できなければならない。この点、従来のマルクスモデルは、戦後資本主義の発展を説明できていない。戦後資本主義の全般的危機なるものは存在したことがないからである。全般的危機が、景気の循環的変動や経済成長に取り残された人々の存在を指すものではないことは明らかである。

このような論理的可能性としての「危機」は、論理的に無限に存在するのであって、それらの「危機」の存在がすなわち体制の危機になるわけではない。これらの「危機」が強調されるのは、それが政治的に要請されているからにすぎない。それは人々を政治的に糾合するためのスローガンなのである。

この政治運動の最終目的は、政治権力の奪取である。そのような奪権闘争の結果成立する社会主義は、社会の生産力の水準とは無関係に成立するため、現存社会主義と全く同じ問題に直面することになるだろう。

私たちは、このような論理的「危機」に対して、このような「危機」が現

実に起こる確率とその被害という危機の期待値と、危機をさけるために彼らが主張する解決法から生じる弊害を比較することが必要である。すると、彼らのいう解決の方が、より大きな災厄を引き起こすことがわかる。彼らの主張する資本主義の「危機」が論理的可能性に止まっているのに対して、彼らのいう解決によってもたらされる災厄は、単なる論理的可能性ではなく、現実に関起こったことなのであり、その災厄を免れる道筋は未だ明確に示されていないからである⁴⁵⁾。

社会主義という二十世紀の大きな実験は、生産力の発展が不十分なままで、社会主義を実行すればどうなるかを私たちに示してくれた。それは理想社会とは似ても似つかぬものであり、現実に行われた性急な社会主義革命は、歴史的には絶対主義革命と規定されるべきものであり、封建的社会を作るだけに終わったのであった⁴⁶⁾。「革命によって約束された労働解放は起こらなか

45) ヤコブレフも、マルクス主義のひとつの根本的矛盾として、マルクス主義が過去に対する精緻な批判は行っても、革命後の社会についてなんら明確なイメージを提示できていないことを挙げている。

「マルクス主義のパラドックスは、この主義が進歩というものを、自然に成立した人類の文化制度の克服、社会的存在の自然な諸対立の克服と結びつけようとしながら、具体的に何をもってこれらの制度や対立にかえることができ、また、かえなければならないかを結局は語らずじまいだった、というまさにその点にある。

ところでこの点には、マルクス主義のもうひとつの根本的矛盾も潜んでいる。マルクス主義では、古いものからの、つまり伝統文化のもろもろの制度や対立からの解放のプログラムがきわめて詳細に立てられているが、これらの制度・対立に代わることができる新たな労働・生活の構造とはいかなるものか、革命の一大変革の後で何をしなければならないか、については、具体的なことは何も述べられていないのだ。」

A・ヤコブレフ [34] 92-93ページ。

そのひとつの理由として、革命を通じた資本主義体制の崩壊と社会主義体制の成立は、歴史的必然性によって不可避免的に生じるのであって、その後の社会がどうなるかは、もはや考察の対象にはならないと考えたからであると思われるが、マルクス主義イデオロギーを信じないものにとっては、革命の結果生まれた社会主義体制やその後の共産主義体制が本当に人間の解放、救済を意味するかどうかは、それがどのような体制であるかによって決まるのであるから、この点が中心的な問題となる。

46) シュンペーターも、「個々人や全集団に対する残虐は、主として状況の未熟性、ロシアの環境、支配者層の性質等に基因せしめうる」と主張したが、歴史的事実から、それはロシアだけの特殊性ではないことは明らかである。

J・A・シュンペーター [11] 346ページ。

ったばかりか、逆に、労働はますます強制化され、農奴制的色合いを強め、所有と生産からの労働者の疎外は絶対的になった」というヤコブレフの言は、ソ連内部にいた者の現存社会主義に対する告発であり、大きな重みを持つ⁴⁷⁾。政治運動としてのマルクス主義がもたらす結果は、必然的にこの絶対主義体制をもたらしこととなろう。そしてそこにおける前衛党の役割とは、この絶対主義体制の支配者となることなのである。

なぜなら、政治運動としての社会主義革命は、社会の生産力の発展とは関わりなく行われるものであって、他の社会的要因や歴史的偶発要素によって、社会主義革命が成功することは十分に考えられるからである。だがこのようにして成立した社会主義体制が、現存社会主義の歴史の再現となることは確実であるとともに、そのような体制が生産力の水準とは無関係に成立したものであるために、やがては崩壊すべきものであることもまた確実なのである。このようなマルクス主義を梃子とした政治奪権闘争は、本来のマルクス主義が説く救済の展望とは無関係なものとなる。そしてその結果生まれる政権がマルクス主義の理想とは無縁の非人道的抑圧体制になることはマルクス主義から見ても、理の当然ということになる。それ故、このような政治的マルクス主義運動と自由主義・民主主義・人権といった近代的諸価値とは両立しえない。だが、これまでの歴史から見れば、マルクス主義の推進した革命運動は、経済的要因を無視した政治的・道義的思考から生まれたものであった⁴⁸⁾。

私たちが二十世紀の歴史的教訓から得られることは、生産力の発展が不十分なままで、社会主義革命を起こせば、悲惨な結果に終わるということである。もし社会主義が実現されるとすれば、それは生産力が無限大に近く発展し、人間の欲望が完全に満たされるような社会においてのみなのである。生産力が欲望に対して不足している場合には、トロツキーのいうように分配の問題が生まれ、そこには必ず調整の問題が出てくる。これがある限り、商品生産や貨幣を廃棄することはできない。このような状況で、社会主義システ

47) A・ヤコブレフ [34] 96ページ。

48) M・メイリア [33] 89ページ。

ムが存在できるという証明はされていない。つまり市場メカニズム以外の調整メカニズムで経済社会が運営できるという証明はされていないのである。

証明されているのは、欲望と生産力の間に乖離があれば、必ずや権力関係がここに介入し、恣意的な分配が行われ、そのために抑圧的な政治メカニズムが成立するということである。客観的に「公正な」分配基準が存在しない以上、何らかの恣意的な分配基準が採用されることとなろう。そこでその分配基準を決定するグループが自らに有利な基準を決定し、それを他のグループに強制しようとする誘惑にうち勝つことは非常に困難である。このことは現実がそれを証明している。現存社会主義が例外なく抑圧的体制となったことは、市場メカニズム以外の調整として抑圧的な権力関係しかないことを物語っているのである。さらに、ゴルバチョフが、ソ連に民主主義的な要素を取り入れようとしたとたんにソ連体制が崩壊したことは、現存社会主義が本質的に全体主義体制であって、民主主義とは両立しえないものであったことを証明している。かつてドラッカーは、マルクス主義は、その経済的成果の貧困さの故に失敗したのではなく、無階級社会の建設という約束を果たせなかったが故に教義としての力を失ったと述べたが⁴⁹⁾、この経済的成果と階級社会の解消は密接な関係にある。つまり、生産力が欲望を超越しない限り、このような無階級社会は到来しないのである。

メイリアは、「社会主義とは「平等」という道義的発想から生まれ、私的所有と市場の廃止でその頂点に達する。そこまで到達しないうちは、真性社会主義とはいえない⁵⁰⁾」と述べたが、その平等を重視し、社会的公正を中心的価値とする現存社会主義体制において、未曾有の抑圧体制が成立したことは、単なる歴史的皮肉ではすまされない。

おわりに

もちろん、欲望より生産の方が優っている社会は、理想社会であり、ユー

49) P・ドラッカー [19] 28-29ページ。

50) M・メイリア [33] 59ページ。

トピアであって、それを拒否する理由はない⁵¹⁾。つまり、社会の最終的理想状態としての共産主義社会を想定し、人類の経済発展の歴史とは、その最終目標に向かう変化・運動であると考えすることは、何もマルクス主義者だけの専売特許ではなく、非マルクス主義者でも十分受け入れられる議論なのである。シュンペーターのいうように、「資本主義過程は社会主義のための事物と精神とを形づくる⁵²⁾」のである。シュンペーター自身は、資本主義のダイナミズムが失われて、社会主義が到来すると考えており、その点で、彼の予測は誤っていたのだが、これまで述べたように、資本主義の発展そのものが、生産手段の所有形態とその意味合い自体を変化させることにより、資本主義を変質させ、社会主義的要素を拡大しているのである。このように資本主義の変化の方向を見れば、マルクス主義者のビジョンと非マルクス主義者のビジョンは収斂すると考えることも可能である。

両者の違いは、むしろ現状に対する評価なのである。すなわち、資本主義社会に積極的意義を見出し、そこで生産力の増大を図り、その過程で生じる種々の問題を資本主義の枠内で解決することによって、その究極にある理想社会を目指すのか。それとも、資本主義社会を性悪でいずれ崩壊するものと規定した上で頭から否定し、批判のための批判だけで終わるのかの違いなのである。

これまで述べたように、現実の資本主義の発展過程において、社会主義的要素の比重は増加している。このような歴史的経過を見れば、マルクスの予想とは異なる社会主義への経路が存在する可能性があることがわかる。いま私たちに求められているのは、これまでの不毛なイデオロギー的対立の止揚ではないのだろうか。

51) もっともこのような社会においても、すべての社会問題が解消されているとは考えられない。なぜなら、人間の争いの原因は、単に物質的な欠乏のみに基因するものではないからである。人々は、愛情や好意、名誉や名声、地位等々をめぐる対立する。これらは生産力が無限大になることで解決するわけではない。

52) J・A・シュンペーター [11] 351ページ。

参 考 文 献

- [1] C. Eicher & J. M. Staats (eds.), *Agricultural Development in the Third World*, 2nd edition, Baltimore: The John Hopkins University Press, 1990.
- [2] 伊東光晴 『経済学を問う2 現代経済の変貌』 岩波書店 1997年。
- [3] M・ウェーバー 濱島朗訳・解説 『社会主義』 講談社学術文庫 1980年。
- [4] 大谷禎之介・大西広・山口正之編 『ソ連の社会主義とは何だったのか』 大月書店 1996年。
- [5] 加瀬俊一 『日本外交を叱る』 TBSブリタニカ 1997年。
- [6] A. Gerschenkron, *Economic Backwardness in Historical Perspective*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1962.
- [7] B. Caldwell, "Hayek and Socialism," *Journal of Economic Literature*, Vol.35, No.4, 1997.
- [8] 桜井哲夫 『社会主義の終焉』 講談社学術文庫 1997年。
- [9] 佐々木力「ロシア革命をめぐる省察」新田義弘ほか編 『権力と正統性』 岩波講座 現代思想 岩波書店 1995年。
- [10] 産経新聞「20世紀特派員」取材班 『20世紀特派員』 産経新聞社 1997年。
- [11] J・A・シュンペーター 中山・東畑訳 『資本主義・社会主義・民主主義』 新装版 東洋経済新報社 1995年。
- [12] J. E. Stiglitz, *Whither Socialism?*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 1994.
- [13] 世界銀行 『世界開発報告』 1996年版 世界銀行。
- [14] 関川夏央 『退屈な迷宮』 新潮文庫 1996年。
- [15] 竹内靖雄 『経済思想の巨人たち』 新潮選書 1997年。
- [16] R・ダンバー 松浦俊輔訳 『科学がきらわれる理由』 青土社 1997年。
- [17] M. P. Todaro, *Economic Development in the Third World*, N.Y.: Longman, 1989.
- [18] L・トロッキー 藤井一行訳 『裏切られた革命』 岩波文庫 1992年。
- [19] P・ドラッカー 上田惇生訳 『「経済人」の終わり』 ダイヤモンド社 1997年。
- [20] F・ニーチェ 信田正三訳 「善悪の彼岸」『ニーチェ全集』第2巻 筑摩書房 1993年。
- [21] E・H・ノーマン 大窪愿二訳 『クリオの顔』 岩波文庫 1986年。
- [22] 速水佑次郎 『開発経済学』 創文社 1995年。
- [23] Jan Knippers Black, *Development in theory and practice*, Boulder, Colorado: Westview, 1991.
- [24] プラトン 藤沢令夫訳 『国家』 岩波文庫 1979年。
- [25] J・ボードリヤール 今村仁司・塚原史訳 『消費社会の神話と構造』 紀伊

国屋書店 1979年。

- [26] J・ボードリヤール 今村仁司・宇波彰・桜井哲夫訳 『記号の経済学批判』 法政大学出版局 1982年。
- [27] J・ボードリヤール 塚原史訳 『透きとおった悪』 紀伊国屋書店 1991年。
- [28] J・ボードリヤール 今村仁司・塚原史訳 『象徴交換と死』 ちくま学芸文庫 1992年。
- [29] J・ボードリヤール, 吉本隆明 『世紀末を語る』 紀伊国屋書店 1995年。
- [30] K・マルクス (エンゲルス編) 向坂逸郎訳 『資本論』 岩波文庫版 (三) 1969年。
- [31] 村上泰亮 『反古典の政治経済学』 中央公論社 1992年。
- [32] 村上泰亮 『反古典の政治経済学要綱』 中央公論社 1994年。
- [33] M・メイリア 白須英子訳 『ソヴェトの悲劇』 草思社 1997年。
- [34] A・ヤコブレフ 井上幸義訳 『マルクス主義の崩壊』 サイマル出版会 1994年。
- [35] 山口正之 『社会主義の崩壊と資本主義のゆくえ』 大月書店 1996年
- [36] J. E. Roemer, "An Anti-Hayek Manifesto," *New Left Review*, May-June 1995.
- [37] 鷺田小彌太 『昭和思想全史』 三一書房 1991年。

A Consideration on Socialism in Historical Perspective

Kazuhiko MOCHIZUKI

By the end of the cold war, we now are free from ideological stalemate so that we can give a new meaning to both the socialism and capitalism in historical perspective. In an interpretation, we can see socialism as one kind of capitalism of which stage is “state monopoly”. In fact, a class called “nomenclatura” possessed all of capital in the socialist countries, and in the extreme case, as in North Korea, one family has the power controlling whole mechanism of society. Today some call the socialist countries “state capitalism”. But this perspective gives rise to some problems. Firstly, there is no profit in socialist countries. So they are capitalism without profit. It is very curious because the profit is the motive of capitalism. Secondly, if they are state capitalism, they have experienced capitalist revolution twice, the first time of 1917, and the second of 1991. It is amazing that one capitalism follows another after capitalist revolution.

Then it is better to interpret socialism as “revised absolutism”, because all socialist countries had characteristics of absolutist system, that is, authorized by Christianity (communist ideology in the socialist countries), bureaucratic system, and militarism. It corresponds “revised serfdom” in East Europe in the age of early modern. In those days, the serfdom was deconstructed in West Europe as the result of advances in productivity, while the serfdom was enlarged in East Europe for their backwardness. We call this “revised serfdom”. In the 20th century, the economic pressure gave rise to a reaction of backward Russia of the same kind. If we interpret socialism as absolutism, it is consistent in historic records of Russia. It experienced an absolutist revolution in 1917 and a capitalist revolution in 1991 and now Russia became a capitalist country.

On the other hand, we now see socialist element in advanced capitalist countries. In historical perspective, capitalism transformed itself since 1930s. The share of public sector has risen ever. The investment fund has come from national savings not from capitalist class. The role of physical capital has changed. The main source of economic growth is not capital accumulation but technical progress and human capital. Recently attention is paid to social

capital (infrastructure) held by states as a momentum of economic development. Therefore, the importance of physical capital is decreasing. In addition, the ownership of capital is defused among nationals. It seems as if a kind of a socialistic progress goes on. As Schumpeter said the capitalism becomes the socialism in the final stage of development because of the success of the former. We can possibly reconcile the conflict between Left (Marxist) and Right (Anti-Marxist).

(もちづき・かずひこ／経済学部助教授／1997年10月28日受理)